弘前城石垣修理

第 16 回 ～石垣積み直し工事の開始～

本丸東面の石垣は、約 135 mにわたって築かれています。この面は、江戸時代に築かれた部分と大正時代に修復された部分で構成されており、場所によって石垣の形状（積み方）が違っています。

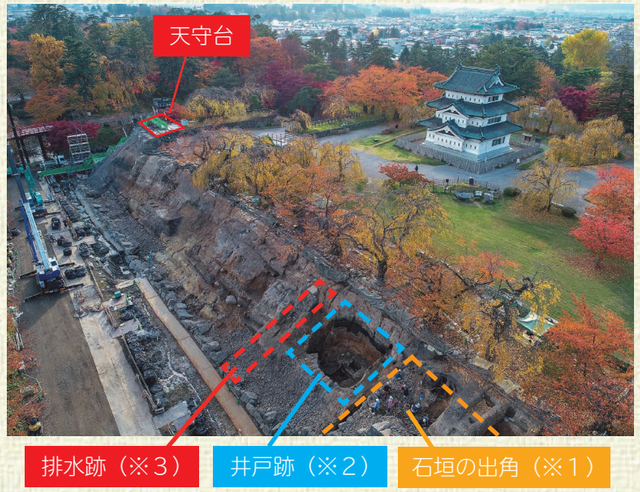
平成 30 年度に解体を終えたこの石垣も、複雑な仕上がりとなっていました。このため、積み直しの際はできる限り忠実に再現し、今後も末永く良好な状態で、歴史的価値を次世代に残していく必要があります。石垣の積み直しに向けては、これまで行った発掘調査の成果をもとに、石垣修理委員会や文化庁の指導を受けながら、修理方法やさまざまな条件について検討を重ねてきました。

また、石垣解体時に行った発掘調査では、江戸時代前期に築かれたと思われる石垣の出角（ですみ）（※１）や井戸跡（※２）、排水跡（※３）が見つかりました。これらは市史や文献等の歴史資料には残っていないもので、史跡を構成する重要な遺構であるため、詳細に調査し記録を残した上で、再び埋設保存します。

また、天守台周辺の石垣は明治時代に崩壊し、大正時代に修復された経緯があります。既に修復から 100 年以上が経過しているため、天守台の地中部を調査した結果、周辺の石垣と天守基礎の耐震補強が必要であると判明しました。約 400 トンの天守を支える部分の耐震対策は容易ではなく、工法の検討にはかなりの時間が必要です。

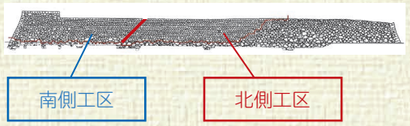
このため、事業に着手した時点の計画では、石垣解体後に『南側積み直し』→『天守曳戻し』→『北側積み直し』の順で工事を進める予定としていましたが、天守土台を万全な状態にすることが重要であるため、『北側積み直し』→『南側積み直し（耐震対策含む）』→『天守曳戻し』の順に工事計画を変更しました。

今秋から、「令和２年度史跡弘前城跡本丸石垣東面（北側）積直し工事」に着手しますが、年内の作業は主に現場準備と新たに補充する石材の調達を予定しています。冬期間は現場作業が休工となりますので、実際に積み直しに取り掛かるのは、来年のゴールデンウィーク後となる見込みです。今後詳細な作業工程が決まり次第、改めて広報ひろさきなどでお知らせします。



▲石垣の出角・井戸跡・排水跡の位置（北東から撮影）

▲現在の本丸東面石垣
（左手前が耐震対策を必要とする南側工区）



▲石垣積み直し工事の工区

※弘前城本丸石垣修理事業について、詳しくは下記 URL をご覧ください。
http://www.city.hirosaki.aomori.jp/ishigaki/index.html
■問い合わせ先　公園緑地課弘前城整備活用推進室（弘前公園緑の相談所内、☎ 33-8739）

博物館のお宝拝見

市立博物館で展示中のお宝を、毎月紹介します。
■問い合わせ先　市立博物館（☎ 35-0700）

第７回　土偶（市教育委員会所蔵）

本資料は、弘前市砂沢遺跡から出土した土偶です。砂沢遺跡は弥生時代前期の遺跡で、６枚の水田の跡が発見されています。稲作が行われていたことを示す東日本最古、最北端の遺跡であるとされ、歴史的に大きな意義を持っています。もっとも、同遺跡の調査からは稲よりはヒエなどの方がより多く生育されていたことがわかっており、あくまで稲作はこうした穀類栽培の一部として行われていたようです。弥生時代の土偶、というのはなんだか珍しい感じがするかもしれません。しかし、特に東北北部では、稲作が行われるようになった後も縄文的な儀式が継続していて、道具も使用されていたと言われています。本資料はそうした土偶がほぼ完全な形で現存している数少ない１つであると考えられています。

頭頂部と両腕、両足首の先を除いて、ほぼ全面に細い串で突いたような模様が見られます。また、頭部の左右にある冠状（かんじょう）の突起は垂れ下がる髪を表し、耳には耳飾りと思われる穴の開いた円形の突起があります。これらの特徴は縄文時代晩期の土偶とも共通するものです。また、前面には乳房とへそも表現されています。本資料は上半身が平成12（2000）年、下半身が平成21（2009）年にそれぞれ見つかり、約10年越しに接合されたことから「奇跡の土偶」とも呼ばれています。

本資料は市立博物館の常設展示でご覧いただけます。

弘前の偉人たち

市教育委員会が発刊している「新･弘前人物志」から、弘前が生んだ偉人たちを毎月紹介します。皆さんが知らなかった偉人と、出会えるかもしれません。
■問い合わせ先　教育センター（☎ 26-4803）

第７回　津軽が生んだ外交官
珍田捨巳

捨巳（すてみ）は、1856（安政３）年に弘前藩士珍田有孚（ちんだありざね）の長男として生まれました。子どものころの名前は辰太郎（しんたろう）といいます。祖父は漢学を教える先生だったので、辰太郎にみっちりと漢学を教えました。

捨巳は藩学校である稽古館（後の東奥義塾）で儒教や英語を学び、教師のジョン・イングに優れた英語力を見出され、アメリカに留学後、外交官の道へ進みます。

英語にかけては外務省で当時右に出るものはいなかったといわれた捨巳。一見人の良い紳士という印象ですが、仕事の面では、意志が固く理路整然としていながら、相手を傷つけず細やかな気遣いのできる人物だったとされ、日英同盟や日米紳士協定などに参加し、日露戦争後のポーツマス条約を結ぶために大きな働きをしました。

東宮殿下（後の昭和天皇）がヨーロッパに外遊をされたとき、供奉長として誠実に対応し信頼を得たことから、天皇となられる際に侍従長の任につきます。老齢をいとわず各地の行幸に同行し、天皇即位の大礼で大任を果たした翌年、この世を去りました。昭和天皇はその死を悼み、深く悲しまれたといわれます。

「弘前人物志」は、弘前が生んだ傑出した人物を中学生の皆さんに知ってもらいたいという目的で、1982（昭和 57）年に初めて発刊されました。紹介した人物をもっと詳しく知りたい人は、「新・弘前人物志」をぜひご一読ください。